

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.6 June 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



6

CONTENTS

・巻頭言

話を聴くということ

／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(13)

明治 22 年 1 月

／深谷 耕治 2

・英語文献にみる天理教 (4)

The Church at Home and Abroad (2)

／尾上 貴行 3

・音のちから—中国古代の人と音楽 (20)

出土楽器が語る音の世界—楽懸—

／中 純子 4

・ヴァチカン便り (68)

現法王、自叙伝を刊行する

／山口 英雄 5

・ニューヨーク通信 (20)

ニューヨークセンター初代所長上原眞雄氏を偲ぶ

／福井 陽一 6

・おやさと研究所ニュース 7

2023 年度おやさと研究所特別講座
「教学と現代」「社会の中で問われる
宗教の役割と使命」報告 (金子 昭)
／第 364 回研究報告会 (1 月 31 日)
／第 365 回研究報告会 (2 月 26 日)
／新刊紹介

巻頭言

話を聴くということ

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

その昔、ハワイ人のキリスト教を調査するために、ハワイ人牧師や信徒ら 30 名あまりにインタビューをしたことがある。テープレコーダーで録音し、その全てを文字起こして何度も読み直し、あれやこれやと考えつつ論文を執筆した。ハワイ人の中では Talk Story と呼ばれるコミュニケーション・スタイルがある。一見ただのお喋りだが、口頭伝承の文化に根ざした彼らの習慣であり、その「お喋り」で先祖の叢智や物語を伝え、仲間同士の紐帯をより強いものにする。ルースにとりともめなく続くが、豊かなメッセージを湛えたお喋り。それが Talk Story である。

インタビュー調査の目的の一つは、ハワイ人キリスト教徒とハワイの伝統宗教の関係について調べることであった。その伝統の一つにアウマクア信仰がある。アウマクアとはオハナ (家族；一族) の祖先神・守護神のことで、人は死ぬとアウマクアの世界に属しながら、子孫にメッセージを送ったり、忠告や警告をしたりすると信じられている。アウマクアもオハナの一員であり、様々な生物や自然現象などに姿を変える。その信仰は代々引き継がれていくが、ネイティブ・アメリカンのトーテムのように外婚集団を形成したりしない。もちろん、この伝統を失ってしまって自分のアウマクアについてよく知らないハワイ人も多い。

ハワイ人キリスト教徒にとってアウマクア信仰はセンシティブな問題なので単刀直入に尋ねることはできない。それなりに時間をかけて他の四方山話も織り交ぜながら話を進めることになる。短くて 1 時間半、長ければ 5 時間以上。オープンエンディッドのエスノグラフィック・インタビューにしても少々長い。あれやこれやと話が進めば、ほとんどそれは Talk Story だ。そうしてようやく本題に辿り着き、アウマクアについて話してもらうところまでこぎつける。例えば、ある年配の女性信徒は、以下のような話をしてくれた。

昔は、人々はそれらの面倒を見ていたのね。でも、世代が変わるごとに新しいやり方が生まれるでしょ。そしてキリスト教について学んだら、さあ古いものは捨てて、神が創造したものについてもっと学びましょう、ということになるでしょ。そうして、これら古いものは、文化的なものとして、単なる伝統として放置される。私の場合、母親の家系はアーヌエヌエ (虹) で、父親の家系はナイア (イルカ) とマノー (サメ) だった。私の夫もマノーとナイア、その系統だったの。

こうして彼女からアウマクアの話を聞き出し、アウマクアには虹のような自然現象、イルカやサメなどの生物がおり、父系と母系の双方から引き継がれることが分かったわけである。また、彼女はアーヌエヌエに助けてもらったエピソードも話してくれた。夫とドライブ中、霧が濃くなってきたので路肩に車を停めたところ、虹がボンネットにかかってきた。それを見て夫はここを離れた方が良いと言い、霧も晴れてきたので再出発したが、虹はどこまでも車について来る。交差点にさしかかる頃に虹は消えていたが、そこで警察官の職務質問を受け、自分たちが一時停車していた場所で交通事故が起こり死傷者が出たことを聞かされたのだった。虹が自分たちに危機が迫っていることを教えてくれたのではないかと夫婦の間で話し合ったという。

このようなインタビュー・データをもとに論文を書いたのだが、彼女が 2 時間あまりのインタビューでただの一度も「アウマクア」という言葉を使っていないことに気がついたのは、ずいぶんと後になってからのことだった。それは彼女にとってその名を口に出すのも憚られるほど距離を置かねばならない存在だったが、同時に具体的な守護のエピソードを話すことのできる存在でもあった。アウマクアは彼女にとってアンビバレントな存在であることを私は聞き逃していたのである。

明治 22 年 1 月

天理大学人文学部講師

深谷 耕治 Koji Fukaya

明治 21 年 7 月に天理教会本部がおぢばに移転され、名実ともに教会本部が定まると、郡山や山名に始まる分教会設置の流れが起こった。明治 22 年 1 月 14 日、増野正兵衛ら兵庫真明組も本部に願書を提出し、翌 15 日に大阪真明組、大阪明心組に続いて「おさしづ」を仰ぎ、兵神分教会の設置をお許し頂いた。ただし、その願書には教会の場所や会長が明記されておらず、引き続き「おさしづ」を仰ぎながら決定していった。増野正兵衛に関するその頃の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治 22 年 1 月 15 日午前 9 時 20 分：大阪真明組分教会設置の伺
- ・同日（陰暦 12 月 14 日）：大阪明心組より分教会所御許し願
- ・同日午前 10 時：神戸兵庫真明講より天理分教会設立の儀、端田久吉、富田伝次郎、清水与之助、増野正兵衛総代にて御許し願／兵庫の富田伝次郎所有の地所にて御許し下さるか、又は神戸の松田常蔵の地所にて御許し下さるか伺／幽冥理を押して伺
- ・同日：増野正兵衛目かい障り伺／同日、押して一時の処地所に建築致す方宜しきや、又は借宅にしておいた方宜しきや伺
- ・1 月 20 日：増野正兵衛目かい足のくさ障り伺
- ・1 月 21 日（陰暦 12 月 20 日）：清水与之助目かい障り伺
- ・1 月 23 日：増野正兵衛足のくさ目かい障り伺

明治 22 年 1 月 15 日、まず大阪真明組が「おさしづ」を伺うと、「先ず今の処、世上の処、一つ理を持たねばならん。…さあへ許そへ」と、世上の動きに合わせたことが示唆されながら芦津分教会の設置が許された。次に、大阪明心組が伺うと、「…さあへ神一条の道はこれからや…。掛かりは先ずへ秘っそへにして運ぶ処、さあへ許そうへへ」と、今後の神一条の道への期待とともに、最初は小さいところから始めるようにと船場分教会の設置が許されている。そして、続いて正兵衛ら神戸兵庫真明講も伺った。同じように「世界一つの理」や「神一条運ぶ一つ理治まる」などの言葉を頂きながら、「これまで明らかという理尽す治まる処、許そうへへ」と兵神分教会の設置が許されている。

その上で、設置場所に関して「兵庫の富田伝次郎所有の地所にて御許し下さるか、又は神戸の松田常蔵の地所にて御許し下さるか」と伺うと、「どちらへこちらへとは言えん。心の理を寄せ、尋ね一つ理受け取る理である」と仰せられ、最後に「幽冥一つ理を知らそう」とお言葉があった。「幽冥一つ理」について押して伺うと「さあへ幽冥とこゝに一つ言えば分かるであろう」と仰せられたが、もう一つ判然と悟れなかったであろう、場所を決定することは出来なかった。

同日、正兵衛は「目かい障り」でも伺っている。「何が間違うてある。思う心が間違うてあるから速やかならん」と、端的に心のあり方が論されている。また、押して教会を建築する方がいいのか、借宅のままの方がいいのかと伺うと、「真実

一つ理、これまでどうせにやならん、こうせにやならんとは言わん」と具体的な指示ではなく「真実一つ理」を論された。「代々どんな事も、今の今見える、来年見える、だんへ日々見える」と、今回の目の障りに対応するようなお言葉も見られる。おそらく、先案じせず先を楽しみに見るよう論されていると思われる。

5 日後の 1 月 20 日、正兵衛は、今度は「目かい」に加えて「足のくさ障り」についても合わせて伺っている。「しいかりどうでも定め切れば身も速やか、家内の身も速やかという」と、案じ心を出さずにしっかり心を定めるよう論されている。このとき、家内の人にも何か身の障りがあったのであろう。一度は決心したことでも、周りの意見を勘案するうちに揺れ動いていたことが想像される。

この頃、清水与之助も同じように目を患っていたようである。次の日（21 日）に「目かい障り」で伺うと「これまで運ぶ理、何か万事心尽す。又々あちらこちらだんへ忙しいへ。運ぶ理が増す」と、「あちらこちら」と忙しくなるが、その中でもおぢばに運べばそれだけ「運ぶ理が増す」とのお言葉を受けた。また、「どちらこちらへどう聞いて運ぶ処、一つに治めてくれるよう」と、事情について談じ合いを重ねてみんなの心を治めるよう論されている。正兵衛は 23 日、再び「足のくさ目かい障り」について伺った。教会の事情や家内の事情について、「心一つ理上どうであろう、一つ案じる理上どうであろう」と案じ心についてふれられて、前回同様に「心変わらんのが定めやで」と論されている。

「くさ（瘡）」

さて、『身上さとし』では、「皮膚・くさ」の項目で、増野正兵衛の 20 日と 23 日の「おさしづ」が取り上げられている。20 日のお言葉については「目と足のくさ障りは、先案じせず、おぢばに住込むことを、しっかりと心定めせよと指示されたのであろう」と述べられている。23 日に関しても「心が変わらないのが本当の心定めである。という意味で、身上は心定めを確乎不動のものにせよと、重ねてさとしていられるのであろう」と述べている。そして『くさ』については、丁度症状が示すように、むしろくしゃしている心の状態、即ちいんねんに心ひかれて、理一条に立ちきれず不足勝ちでいるところを、あざやかに理の上から思案して、どこまでも理が立つようにつづいて行けということを示していられる」とまとめている。⁽¹⁾

正兵衛に関するこの頃の背景としては、おぢばへの移転とともに、兵神分教会の場所や会長の問題があった。正兵衛もいろいろと心を揉んでいたことであろう。清水与之助の「目かい障り」に対するお言葉に比べて、正兵衛に対しては「思う心が間違っている」とはっきり論されていることや、案じ心について再三論されていることが印象的である。

〔註〕

- (1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962 年、249～250 頁。

前回（2024年4月号）に引き続き、アメリカで General Assembly of The Presbyterian Church が発行していた月刊誌『The Church at Home and Abroad』Vol.XVI. No.94, (October 1894) に掲載された天理教に関する記述をみていきたい。

前半では天理教の概略が述べられていたが、後半に入ると信仰実践の様子について書かれている。まず、“In their worship, they rely a great deal upon noise, using the drum, fife and shamisen, accompanied by the dance.”（かれらの祈りは、太鼓、笛、三味線をつかって踊るため、非常に騒々しい。）と記述している。そして、“They teach the defilement of sin and the necessity of spiritual purification.”（天理教では罪による汚れと精神浄化の必要性を説く。）と説明した上で、“The most usual prayer to their god, Tenrio, is ashiki wo harei (take away my sins). As they repeat this, the hands are turned, palms outward, and pushed forward, as though pushing the sin away. Then the hands are reversed palms inward, and drawn towards the breast, while the prayer kigomi tamae, (make me clean) is repeated many times.”（彼らの神テンリオーへのごく日常的な祈りは、アシキ ヲ ハレイ（私の罪を取り除く）である。これを繰り返し唱えながら、罪を追い払うように両手をひっくり返し手のひらを外へ向け前で押し出す。そして、キゴミ タマエ（私をきれいにする）という祈りを何回も繰り返し唱えつつ、手のひらを内側に反転させながら、胸に向かって引きつける）と祈る際の手ぶりについて紹介している。このように、手振りの実際の様子を記している点は非常に興味深い。

天理教の現状については、“The Tenrikyo is sanctioned by the Government as a branch of Shinto, but it has met with opposition, and persecution, from the Buddhist priests whose prestige suffers on account of it.”（天理教は神道の一派として政府から公認を受けているが、仏教の評判が損なわれているとして、僧侶たちから反対や迫害を受けている。）と説明している。

最後にこの記事の筆者は、天理教の発生と急速な進展の理由について以下のように考察している。

It will be a matter of surprise to many that a religion founded upon such a low grade of superstitious stories could get any hold in Japan. But it is a fact that a large mass of the people have come into very slight contact, if any, with the new civilization that has been at work for two or three decades. The majority of farmers and ignorant people are practically in the same state of civilization that they have known for hundreds of years. They are industrious, honest and fearfully superstitious. (多くの人々にとって、このような低俗な迷信にもとづく宗教が日本で受け入れられていることは驚きであるだろう。しかし、日本が新しく文明化されてから未だわずか 20、30 年であり、多くの人々はこの文明にほとんど接触していないか、もし触れていたとしてもごくわずかであるのは事実である。農民や無学な人々の大多数は実質的にはこれまでの何百年と同じような文明のレベルにある。かれらは勤勉で、真面目

で、そして恐ろしいほど迷信的なのである。)

Is this a beginning of the gradual disintegration of the old faiths of Japan? Many of the new religions of India are so interpreted. There is little doubt that Buddhism is losing its hold on the confidence of the people, because of the immorality of the priesthood. The low state of morals is lamented all over the country. The Tenrikyo seems to be an attempt at a moral reformation. Has it risen through dissatisfaction with Buddhism? Will the dissatisfaction continue to deepen, and the breach to widen? (これは日本の古い信仰が段々と崩壊していく始まりだろうか。インドの多くの新宗教においてはそのように解釈されている。僧侶の品位の低下により、仏教が人々の信頼を失っていることはまちがいない。モラルが低下している様子は日本中で見られる。天理教は一つの道徳的改革の試みであるようにみえる。仏教への不満から天理教が発生してきたのだろうか。不満はますますつのり、民衆との亀裂はどんどん広がり続けるのだろうか。)

Is there not an important field among this class of people for Christian work? So far Christian propagation has been carried on largely in the great middle class, beginning with the Shizoku and students, and more or less among merchants and soldiers. But comparatively little has been done among the agricultural and lower classes. Here is a great population ready and waiting for the Gospel. (キリスト教伝道にとってこの階層の人々は重要な対象者ではなかったのではないか。これまでキリスト教の宣教対象は主に士族や学生などの中産階級であり、それ以外では商人や軍人であった。それに比べると農民や下層階級へ宣教はなされていなかった。今ここに、多くの人々は福音を聞く準備ができ、その日を待っているのである。)

このようにこの記事の筆者は、天理教の発生と伸展に関して、下層階級の人々の無学さという点、日本の伝統的な宗教の衰退という点、そしてキリスト教の宣教活動において下層階級はその対象となっていなかった点について言及し、福音を待つ多くの人々の存在があるのだと結んでいる。そこには、天理教という新興の宗教に注目しながら、当時の日本でのキリスト教伝道への新たな展開に期待している様子がうかがわれる。

今回の天理教紹介記事は、以前取り上げた英字新聞『Japan Weekly Mail』の 1894 年 3 月 3 日号に掲載された天理教についての記事同様、まとまった分量で掲載された英文の天理教紹介としてはかなり初期のものと言えるだろう。天理教に関する最初の英文研究論文とされるグリーンによる『Tenrikyo』は、翌 1895 年 3 月と 6 月にまず『Japan Weekly Mail』にて研究報告会での発表記録として掲載され、同年 12 月に『日本アジア協会紀要』上で論文として発表されている。このグリーの論文についてはこれまでもさまざまな天理教研究者によって取り上げられているが、次号以降それらを概観しながら、この時期におけるグリーン論文の意義を改めて考えてみたい。

出土楽器が語る音の世界—楽懸—

これまで中国古代楽器を紹介してきたが、古代にあっては、楽器の音色に加えてその装飾された外観も音を越えた力を醸し出していたようである。音楽は決して聴覚だけで味わうものではなく、視覚も含めて全神経を総動員して感じるものだとすると、やはり古代楽器の形象にも注目せねばならないだろう。今回は、とりわけ鐘や磬を懸けた台としての楽懸について、あらためて考えてみたい。

鐘や磬を懸ける道具

中国雅楽の主要楽器である鐘と磬、これらは懸けて使用された。この楽懸について、細部にわたる解説がなされている『隋書』音楽志をみてみたい。

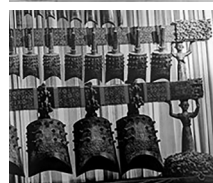
簣・簠は鐘や磬を懸けるためのものである。横に渡してあるものを簣といい、魚などで装飾する。縦に立てるものを簠といい、動物や鳥などで装飾する。簣は木の板をその上に置く、これを業という。殷人は業に鋸状の凹凸を彫刻し、そこに鐘や磬を懸けた。周人は厚織りの絹地で飾りを造り、それに壁を載せ、その下には五色の羽を垂らして、簣・簠の角にたてた。近ごろはさらに金の博山（装飾品）を簣の上に加え、五色の糸でつくったふさを垂らして、彩色の羽を合わせた。この方法は梁・陳・北齊・北周・隋の五代で踏襲され、ともにこの簣・簠を用いた（六朝楽府の会編著『『隋書』音楽志訳注』和泉書院、2016年、437頁参照）。

『隋書』の記述には、ほかに楽懸は上下二段となっていて、それぞれ8つの鐘や磬が懸けられていたという。その形態は清朝になっても踏襲されていた。下図のように康熙52年（1713）



には銅製鍍金で上下二段それぞれ8つの鐘で編成されたものが制作された（『中国楽器図鑑』山東教育出版社、1992年、72頁）。

この鍍金でできている一見豪華な清朝のものとは比べて、古代の編鐘はどうだったのだろうか。先の『隋書』の記述では、魚や動物で装飾されたとある。以前にも引用した1978年に発掘された湖北省の曾侯乙墓（紀元前433年）の編鐘は、その装飾も特別なものである。



その一部分をみてみたい。それは簣（横木）を支えている人形である。その足元と頭上には現在の感覚からはグロテスクに重なり合った小龍のレリーフがある。さらによく見ると、一つ一つの鐘を支えるのは、手を握り合った野獣である。荘厳な鐘の音は、聴く者の心を日常から遠い世界へとといざない、畏怖の念を起こさせるのに十分であっただろうが、この形象が生み出す視覚的効果が、何よりも戦国時代の王の巨大な権力を象徴しているようである（曾侯乙墓関連の上の三図は『中国音楽文物大系 湖北巻』大象出版社1999年による）。



埋葬された楽懸

さらに紹介したいのは、春秋晩期の浙江徐家嶺九号墓から1990年に二台が出土した銅製の鼓の懸け台（架座）である（修海林・王子初『看得見的音乐 乐器』上海文艺出版社、2001年、73頁）。河南省文物考古研究所にいまは保管されているこの架座は、頭は龍、身体は虎、足は亀の怪獣で、口から舌を出している。その頭上には蛇のような形の龍が6匹おり、孔雀石で象嵌の装飾が施されている。さらに背中には、1匹の怪獣がおり、その口には蛇が銜えられている。ここに懸けられた鼓は、楽しく不可思議な音楽の世界を表現していたように想像される。



その装飾の威容に魅せられて、上記の架座も曾侯乙墓の編鐘の楽懸も、ともに墓に埋葬された楽器を懸けていたことを忘れてしまいそうであるが、この装飾や形態は鎮墓のためであろう。精巧に作られた楽器群からは、あの世でもこの世と同じ音楽の快楽を味わうために制作されたという解釈もできるだろうが、おどろおどろしい形態の楽懸からは、死者を邪気から守る役割を音楽に託したとも推測されるのである。

皇帝と楽懸

話を生きている人間に戻そう。最初に紹介した『隋書』音楽志には、楽懸についてさらに具体的に以下のように記す。

高祖（楊堅）は天命を受けて即位（581年）すると、法令を定め、宮懸は東西南北の四方にそれぞれ2セットずつ配置し、12の鐘とあわせて20セットとした。1セットの楽懸にはそれぞれ1人を、建太鼓には4人を、祝と故にはそれぞれ1人を配置した。歌・琴・瑟・簫・筑・箏・擗・笙・卧箏篴・小琵琶は、四面にそれぞれ10人をあて、編磬のもとに配置した。笙・竽・長笛・横笛・簫・篳篥・篳篥・塤は、四面にそれぞれ8人をあて、編鐘のもとに配置した（『『隋書』音楽志訳注』218頁参照）。

楽懸の数はその地位によって定められている。皇帝の宮懸は東西南北4面、皇太子の軒懸は東西北3面、さらに大夫の判懸は東西2面、士の特懸は東1面だけとなる。皇帝の宮懸は天地・宗廟の祭祀に、ほかはそれぞれの祭礼のためにもちいられた。しかし、それら形や数を揃えることを求めた雅楽奏楽は、結果として宮廷音楽のなかでも形骸化したものになった。白居易「立部伎」（『白居易集箋校』卷三）で、宮中音楽のなかで坐部伎の奏楽が素晴らしく、立部伎は劣るが、それよりもさらに劣悪なのは雅楽の楽人として「始めて楽懸に就いて雅音を操る、雅音の替壊一に此に至れり」と嘆き、これでは宮廷の天地の祭祀で、神を感動させることは無理だという。それでも楽懸にかけられる楽器やそれを操る楽人の配備という形式にこだわった雅楽奏楽は清朝までも連綿と継承された。もちろん単純に比べることはできないのだが、楽書に記された古の形をなぞることに汲々として生きる後世の統治者よりも、戦国時代の曾侯乙のように自分を楽しませ、また墓の鎮護のために、楽器とそれにより力を与える装飾を施した楽懸を自分の墓に埋めさせた古代の統治者の方が、より自由を謳歌していたように感じるのである。

現法王、自叙伝を刊行する

本年3月19日、Heyper-Collins 出版社よりローマ法王の自叙伝『人生―歴史の中における私の歴史』が刊行された。本書は、ヴァチカンのオブザーバーで、法王の親しい友人であるファビオ・マルケーゼの協力を得ており、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ブラジル、フランス、ドイツ、メキシコ、ポーランド、ポルトガル、スペインなどで販売されている。以下、本書の内容を紹介しよう。

法王の生い立ち

フランチェスコ法王は、本名をジョルジュ・マリオ・ベルゴリオという。フランチェスコというのは、アッシジの聖フランチェスコに由来する。1936年12月17日生まれの満87歳である。もっぱら父方の祖父母ヨハネスとローサによって育てられた。

祖父母はイタリアのトリノ方言を使っていたので、法王自身も幼少時代はこの言葉を話していた。祖父母は当初、マファルダ号という船で1927年にアルゼンチンへ移民する予定であった。ところが、お金が無くて乗船券を購入することができなかった。しかし、運命は彼らを救った。マファルダ号はブラジルの沖合で座礁して沈没し、300人もの移民が命を落としたのである。一方、ようやくお金の準備のできた祖父たちは、1929年2月にユリウス・カエサル号に乗って出国し、2週間後にアルゼンチンに無事到着した。

第2次世界大戦後、祖父はジョルジュをよく映画館に連れて行ってくれた。ロセリーニの『ローマ・解放された街』、ヴィットリオ・デ・シーカの『パイザもしくはドイツ』『子供は我々を見ている』、またフェデリコ・フェリーニの『道』をよく見たものだ。歌に関しては『オーソレミオ』『ザザンはどこ』が好きだった。

飲食店だったか説教室だったか、よく覚えていないが、第2次世界大戦でアメリカが日本の広島、長崎に恐るべき原子爆弾を落としたことを、ジョルジュは知った。原爆を用いたことは人類に対する大きな罪である。このことは人間として、イエズス会員として、決して黙認することはできない。日本人に癒しを与えるために、彼は日本に行こうと決心した。しかし、体調がそれを許さなかった。もし、その時に日本に行くことができていたならば、自分の人生も変わっていたことだろうと、法王は述懐する。

若き日の苦悩

戦後、アルゼンチンでは共産主義者が次々と逮捕されていた。「赤狩り」が始まったのだ。聖職者たちは「貧しき者」を救済するために動き回っていた。その姿が、当時の為政者には共産主義の活動に見えたらしい。彼らは共産主義者たちと見なされ、迫害を受けた。若き日の法王もその一人であった。

キリスト教の聖職者は結婚することも妻帯することも禁止されている。法王も若かった時にはその問題で苦悩した。結婚しようか、あるいは独身で過ごすかと思悩む時があった。修道院に入る前にはガールフレンドがいたこともある。その娘は優しい女性で、映画の世界で働いていた。彼女はその後、ある

人と結婚して子供を授かっている。

法王は、人工妊娠中絶には絶対に反対である。生命は受胎の瞬間から死の時まで続いているからである。代理出産にも反対だ。人間の生命は売買の対象ではなく、子宮を道具のように扱ってはならないからである。

やがてアルゼンチンに独裁政治の嵐が吹きまわった。フランチェスコは、聖職者アンジェレリの教えを信奉していた学生たちを匿ったり、守ったりした。時には、聖職者の衣装を着せて逃したり、自らの身分証を持たせて逃がしたことすらあった。

ヨーロッパ、そしてヴァチカンへの思い

3年ほど前、ヴァチカンにも新型コロナの波が押し寄せてきた。我々の身体を守る薬もできた。法王もすぐにそれを申し込んだ。神の御加護で、コロナにはかからなかった。病院には2、3回入院したが、それは他の病のためだった。

法王はヨーロッパについてこう考えている。ヨーロッパは各国がそれぞれの文化と歴史を持っているが、一つの目標に向かって、つまり世界平和に向かって力を合わせていくことが大切だ。法王は、そのようにハンガリーのヴィクトール・オルバン首相に語った。法王は何度も平和維持や軍需産業の問題について話し、人類に訴えている。「時はきたれり。地球を救うためには時が迫っている。だが、若者に一言言っておこう。だからといって、人々を脅してはならないし、暴力を使ってはならない。」

我々は、全てを抱きしめ、全てを迎え入れる母なる教会を、今一度深く考えるべきだ。そう法王は訴える。同性愛など性的少数者もまた、主をもとめている。しかし、彼らは、今教会から押し出され、排除されている。だが、神はすべての人を愛しているのだ。とりわけ罪深い人をこそ愛しているのだ。同性愛者の結婚は不可能であるが、市民的融合は全く問題が無い。彼らが、他の人たちと同様に、法的擁護を受けるのは当然だ。

法王はまた、被造物を守る声明を発している。「時は迫っている。地球を救おう。若者にこの運動に参加するように呼びかけている。だが、私の言ったことがすべて裏目に出ってしまったら、私は精神科医のところに行かなければならないかもしれない。『法王フランチェスコは気が狂っている』だの『フランチェスコは教皇庁を壊している』だのと言う者もいる。しかし、ヴァチカンは伝統的に君主国家であり、それはヨーロッパで唯一のものだ。それゆえに法王＝君主という時代が続いているのだ」と。

法王の任務には終わりはない。生きているかぎり、法王の任務を全うしたい。フランチェスコは「私は名誉法王にはならない」と主張する。「もしそれが不可能ならば、一介の神父に戻り、ローマの市民擁護者になりたい。できうれば、告白者の聞き役になり、告白を促し、神意を伝えたい。サンタ・マリア・マジョーレ教会で、その役目を成就できれば最高だ。」

最後は感謝と祈りで締めくくられている。「神様、ありがとうございます。私に健康な体を与えてくださり、危ない時に連れて通ってくださったことを感謝いたします。これからも神にもたれ、神に仕えていくことを感謝し、世界が幸多く、平和であることをお祈りいたします。」

ニューヨークセンター初代所長上原眞雄氏を偲ぶ

天理教ニューヨークセンター所長

福井 陽一 Yoichi Fukui

コロンビア大学占拠

マンハッタンにあるコロンビア大学では、イスラエルのガザ侵攻を非難する学生による抗議活動が続いている。次第に活動が過激化し、校舎建物を破損して侵入して占拠し、バリケードを築き、窓を割るなど暴動を起こす事態にまで悪化している。4月30日、大学側の要請によってニューヨーク市警が出動して、建物内に立てこもる学生らを強制的に排除し、多くの逮捕者が出た。これらの抗議活動は全米各地の大学に広がっており、これまでに2,000人以上の逮捕者が出ているようで、ベトナム反戦運動以来の全米規模の学生運動になりつつある。

デモに参加しているのは一部の学生である。それ以外の一般の学生からは、キャンパスがロックダウンされているため、図書館や食堂を使えなかったり、授業が休講したり、リモートになったりしているため、高額な授業料に見合う教育が受けられないと不満の声が高まり、授業料の返還などの要求も出ているようだ。5月6月は卒業式のシーズンでもあり、卒業式の開催も危ぶまれている。すでに中止を決めた大学もある。

全米の大学に拡大する反戦活動だが、学生とは無関係のプロの市民活動家が潜入して学生を煽っているとか、外部から資金が流れてプロの活動家を支援しているとの話も聞かれる。ニューヨークのエリック・アダムズ市長は、「若者たちを過激化しようとする動きがある。彼らがそれをやり遂げ、その存在が白日の下にさらされるまで、手をこまねいて待っている気はない」と述べている。コロンビア大学当局は、抗議デモには「外部の扇動者たちが関与しており、彼らが学生たちを訓練した」と警察に伝え、支援を要請したとのことだ。実際に拘束したデモ隊の半数近くが大学とは無関係の外部者だという、警察側の発表もある。そうであれば、プロの活動家に扇動された一般の学生たちが一番の被害者になりうる。この動きがどこまで激しくなるか非常に心配だ。

バイデン大統領は全米各地の大学でのデモについて「抗議する権利はあるが、混乱を引き起こす権利はない」と述べ、キャンパスの占拠などの違法行為を非難した。イスラエルを支援する現政府に対して若者の支持離れが目立ちつつある。今年の大統領選で再対決するトランプ前大統領は、コロンビア大学でデモ隊を強制排除した警察官らを「素晴らしい仕事をした」と称賛。バイデン氏の弱腰な対応が混乱を招いたと批判をしている。この動きは大統領選挙にも影響が出てくるかもしれない。

ニューヨークセンター初代所長上原眞雄氏を偲ぶ

2024年1月10日、ニューヨークセンター初代所長の上原眞雄氏が出直した。享年89歳だった。上原氏は天理大学スペイン語学科を卒業後、1962年にニューヨークに渡った。それは、ちょうど吉田進氏や森下敬吾氏がニューヨークに布教に来たのと同じ頃になる。その頃はブロンクス区にあった吉田氏の自宅に皆集まって月次祭を勤めていた。1971年に吉田氏がハワイ伝道庁庁長としてハワイに行ってから、集まる場所がなくなり、当時おもだった信者の家庭を毎月順番に廻りながら月次祭

を行っていた。そんな中、同年7月に3代真柱がニューヨークに巡教された。それを契機として集いの場所設置の機運が高まり、翌1972年クィーンズ区にあるアパートに神様をまつり、センターの第一歩となった。その後、上原氏の自宅で神様を預かって月次祭を勤めていた。

上原氏は1972年にニューヨーク・ジャージー笠岡アメリカ布教所を開設している。1977年に現在のニューヨークセンターが設立された時には、センター初代所長として務めた。布教所長を兼任しながら、センターの運営に携わり、現在のセンターの土台を築いた。渡米以来62年間、長きにわたりニューヨークのお道の先駆的な存在として活躍された。

個人的な思い出としては、ニューヨーク文化協会の設立準備委員として熱心に会議に参加され、文化協会の設立に携わり、設立後も運営に心をかけられたことを思い出す。文化協会では、日本語学校の上級クラスを長い間担当された。読書が好きで、小説などの生教材を時間をかけて準備し、楽しく熱心に教えられた。上級クラスを教えるのは準備も知識も要求されるので、私達スタッフはとても助かっていた。音楽も愛好され、晩年は集めた音源をコンピューターに移したり、アーカイブしたりするのが趣味だった。出直される1年前の頃でもお元気で、毎週のように自分で車を運転してニューヨークセンターに来られていた。センターのスタッフと一緒にコンピューターを調整したり、時には自宅のフェンスと一緒に直したりして、お元気な様子だった。

センターの10周年記念誌に上原氏の手記が掲載されているので、その一部を紹介したい。

「今、こうして思い返してみますと、月次祭を欠かすことなくつとめさせて頂いたことが、今日の、このニューヨークの道に続いていると思います。そして、このニューヨークセンターは本当に自然に出来上がってきたのです。無理することもなく、また、無理を強いられることもなく、より集う人たちは皆、自分の心でこのセンターに参拝にみえる。とても素晴らしいことです。人に言われて来るのではなく、お参りしたくてやってくる。実に素晴らしいことだと思います。」

長きにわたりニューヨークの道の発展の上に尽力されたことに、心より感謝申し上げるとともに、先人の足跡を見つめ直して、ニューヨークセンター50周年の節目に向かってさらに一段と成人の道を歩めるように努力したい。



文化協会起工式での上原氏

2023 年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」
「社会の中で問われる宗教の役割と使命」報告

金子 昭

おやさと研究所は天理教学の研究機関として、研究の成果を教内外に発信していくという社会的役割を担っている。そこで求められるものは、天理教教理のオーソドックスな理解の提供であり、またそれと同時に、現代の諸問題に対する新たな教理解釈の可能性の提示である。「教学と現代」は前者の教学の基本路線を踏まえつつ、後者の新たな解釈可能性を切り開いていく試みの講座である。

今回は、天理総合人間学研究室と天理ジェンダー女性学研究室の共催として、「社会の中で問われる宗教の役割と使命—格差・ジェンダー、そして宗教の公共性—」と題して、3月25日、天理大学研究棟にて開催。約40名が参加した。

最初に、愛知学院大学文学部宗教文化学科の熊田一雄准教授による「現代日本社会と宗教の役割」という基調講演が行われた。熊田氏は宗教社会学の立場からジェンダー論に造詣が深く、また天理教についても共感を持って研究を行っており、その成果を『格差社会の宗教文化—「民衆」宗教の可能性を再考する』（風媒社、2022年）で纏めている。

熊田氏は、まず現代日本社会の動向を示す一つの特徴として、女性が強くなったことと、そうした女性についていく若者の姿について紹介し、実はこの傾向は「女性の侠気（男気）」（女頭目）の伝統として近世から見られるものだと言明した。現代日本において、そうした事例はアニメのヒロインなどに現われていると言う。ところが、宗教の側では変化するジェンダー秩序への対応が立ち後れ、それが教勢の低下につながっているのではないかと指摘した。大本系諸教団で言えば、世界救世教と生長の家がまさにそういう傾向にあり、一方、大本の場合は歴代の教主夫婦が男女同権的な立場に立ち、それが教団の強みになっていると分析した。

そこで、現在再評価すべきは「侠気」の伝統であるという。この伝統は、「企業戦士」をやめられない男性よりも、「強くなった女性」と「それについていく若者」に継承されている傾向があるとし、実はこうした「侠気」は天理教の教祖にも見られると指摘した。教祖の「力比べ」を見聞した信者たちは、社会的不正義に対して暴力に訴えたり、迫害に対しても暴力に訴えたりする必要はなく、安心して「神にもたれて通る」信仰一筋の生活をしていくべきだという示唆を得たのではないかと、熊田氏は推測する。そして、現在問題になっているDV（夫婦間の暴力や児童虐待）に対しても、『教祖伝逸話篇』の137話「言葉一つ」などを紹介し、男性信者を強く戒めた教祖の姿勢を有効な処方箋として提示した。

また熊田氏は、現代日本を覆う新自由主義や格差社会の風潮の中であって、教会の「大きな台所」を活かした子ども食堂が天理教の社会貢献として「非暴力の『谷底せりあげ』」になると指摘した。そして、「おたすけ」に関して言えば、シッコロール（病人の立場）に落ち込んだ人がセラピスト・フッド（セラピストの立場）に立つことで心が安定してたすかるという現代

精神医学の考え方を紹介。「人たすけたら我が身たすかる」という教えが現代的意義を持つのではないかと示唆した。

このあと、おやさと研究所側から、「ジェンダー論の視点から」と題して堀内みどり主任が、また「宗教の公共性の視点から」と題して澤井真研究員が、それぞれ天理教学をベースにコメントを行った。

堀内主任は、まずジェンダー論は性別に関わる現象を問題にするだけでなく、むしろ社会の当たり前を疑う視座であると定義し、この議論が従来見えていなかった社会の格差や差別の検討を可能とする見方になると述べた。ジェンダー論とは、例えばそれまで「本能」や「自然」だとされてきた「男／女の二分法や異性愛」という考え方が、実は社会によって作られたもので、それが日常生活や思考の枠組みを規定していることを明らかにするものである。ジェンダーは、社会を男女の性別で二分する思考的特性と、それを当然のものと思わず社会状況とを含んでいる。ジェンダーバイアスは、就職活動のエントリーシートの「性別」欄から日常的に使う言葉にも見られるもので、それが男女の性規範や役割期待をも生じていると言う。

堀内主任は、その上で、「弱いが苦しんでいるのを見のがせない気性」を意味する「侠気」という言葉にも、実はジェンダーバイアスが見出されると指摘。つまり、「侠気」は男らしい気質（男気）とされ、女が自然に備えているとされる気質（女気）と対比させられているのである。これに対して、天理教では、『逸話篇』28話「道は下から」、32話「女房の口一つ」、92話「夫婦揃うて」、137話「言葉一つ」、189話「夫婦の心」などの事例を挙げ、教祖は性役割に固執せず、互いに立てあい、たすけあう人間関係の基本が夫婦というつながりの中にあることを教え諭されたと述べた。

一方、澤井研究員は、公共宗教学について紹介した上で、「宗教の公共性」を「天理教の公共性」と読み替えながら考察を進めた。天理教の公共性は「たすけ」という視点から読み解くことができるという。「たすけ」とは、①立教において親神天理王命が教祖を通して示された世界たすけ（世界の救済）であり、②陽気ぐらしを目標として、教祖のひながた（たすけ一条の道）を歩むことであり、③信仰者が人をたすける心で日々を生きること（ようばく一人ひとりが教祖の道具衆）であるという3点に纏められる。

澤井研究員は、天理教が社会との接点を多くもつことで、ただ単に社会関係資本としての信用を得るというだけでなく、「たすけ」へと繋がる道筋をつけることができると主張。社会貢献の領域は至るところにあり、天理教信仰者と周囲の人々の接点はそうした領域に見られるが、あくまで軸足は教祖の道具衆としての「たすけ」の一環であることが天理教の特徴であると述べた。

この後、金子がコーディネーターとなり、講師の熊田一雄氏、また堀内主任、澤井真研究員をパネリストとして、フロアを交えての自由なディスカッションが行われた。発題者や参加者の間で活発な質疑応答や積極的な意見交換がなされ、充実した内容の講座となった。

第 364 回研究報告会（2024 年 1 月 31 日）

「バークリ哲学における神の存在に関する諸論証」

山川 仁（国際学部非常勤講師）

本報告は、古典的イギリス経験論の代表的哲学者でありイギリス国教会の主教でもあったジョージ・バークリ（George Berkeley, 1685～1753）の哲学の概要および彼が提示した神の存在に関する諸論証を紹介するものである。報告者は、バークリの生涯に関する導入を行ったのちに、彼独自の哲学体系である非物質論（immaterialism）の基本的枠組みについて解説し、続いて、彼特有の言語論および彼による神の存在に関する諸論証の紹介を行った。

バークリの言語論は、言葉には（「観念」を介さずに）人の感情や行動に直接作用する機能があることを早い段階で指摘したものととして、現代においても評価されている。バークリは、彼の非物質論に伴う問題点との兼ね合いで、神の存在に関する複数の論証（とされるもの）を提示している。第一に、「受動性論証」と呼ばれるものがあり、これは身の回りの諸物の実在性を保証する存在としての神を導く論証である。第二に、「継続性論証」と呼ばれるものがあり、これは身の回りの諸物がわれわれの知覚とは独立に継続して存在するという常識的信念を擁護する目的で持ち出されるとされる（ただし、それをそのような目的を持つ「論証」とみなすと難点が見出される）ものである。加えて、彼は、より積極的に神の存在を肯定するための論証も提示している。それは、言語使用によって他の理性的な心の存在が認められることを前提として、神も同様の言語を使用していることを証明し、神の存在を導くという独特なものである。

報告後の質疑応答において、バークリが言及する神の特徴について、また、非物質論の基本的枠組みに関する不明点等について多くの質問を頂いたが、いずれも報告者の今後の検討課題と関わるものであり、有益な報告機会となった。

第 365 回研究報告会（2024 年 2 月 26 日）

「歴史的建造物の保存と活用、価値付けと活かす、伝える、育む」

田中 梨絵（人文学部講師）

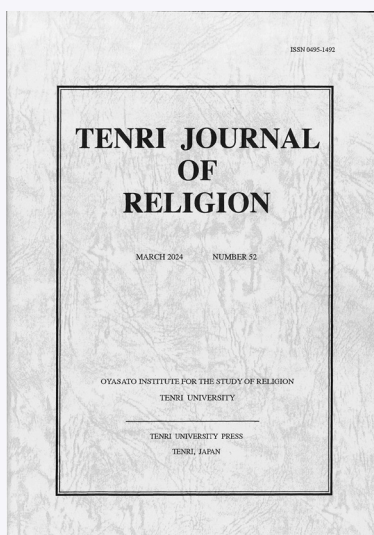
本発表では、歴史的建造物の保存と活用を取り巻く社会状況や文化財保護制度を踏まえ、歴史的建造物の保存にとって重要となる「価値付け」について取り上げた。社会的需要に対応して保護対象を拡大してきた文化財保護法は、建造物においても、社寺、城郭、民家、伝統的建造物群、洋風建築、近代化遺産、鉄筋コンクリート造の現代建築、土木遺産などと、時代とともに対象が拡大し、価値も変化している。文化財建造物を含む歴史的建造物の保存では個別の価値をさまざまな視点から見出すことが重要となる。

発表者は、修士論文で取り組んだ京都旧番組小学校校舎の保存プロセスの調査から、建造物の歴史性、芸術性、学術性といった価値以外にその建造物と関わりの深いコミュニティの思い入れに着目している。発表では、歴史的建造物やその建造物が所在する地域を大切に思う人の「思い」を伝え、同じように大切に思う人を育むことを目的に、学生と一緒に奈良町で取り組んだ実践活動も報告した。質疑では、同席した生涯教育専攻の学生が活動への思いを発言する時間もいただき、学生が地域で活動する意義についても確認する機会となった。

新 刊 紹 介

おやさと研究所では、『Tenri Journal of Religion』No.52、『「碍」の字表記問題再考』（グローバル新書 18）を発行しました。内容の詳細に関しては研究所のホームページ（<https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>）をご覧ください。

グローバル新書は、道友社販売所で購入いただけます。『Tenri Journal of Religion』（Web 版のみ）は、研究所ホームページよりご覧いただけます。



『Tenri Journal of Religion』No.52
(Web 版のみ)



八木三郎著 『「碍」の字表記問題再考』

グローバル天理
第 25 巻 第 6 号（通巻 294 号）

2024 年（令和 6 年）6 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋
編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan